東医大誌　51(3):325〜326, 1993

研究会報告

第60回
東京医科大学血液研究会

日　　時：平成4年12月7日（月）
午後4：00〜
会　　場：東京医科大学病院本館6階
第一会議室
当番教室：外科学教室第二講座
特別講演：抗血小板療法，その問題点
大阪大学医学部 第2外科 講師
上　林　純　一　先生

1．　天然型α－ＩＦＮによる血小板血症治療経験

（老年病学）岡田豊博、中野正剛、宇野雅宣、米田陽一、新弘一、高崎　優

今回我々は、本態性血小板血症に対して天然型α－ＩＦＮを使用する機会を得たので、その結果について報告する。症例１：83歳、男性。自転車転倒にて入院となり、血小板増多（血小板数 151万）を指摘される。ブズルファン投与するも著効は認められず、ＩＦＮを使用する。ＩＦＮ連日投与後２週間で、速やかに血小板数が50万にまで減少し、ＩＦＮの漸減、週１回投与が可能であった。症例２：67歳、女性。耳鳴りを主訴に某院受診し、血小板数 191万を指摘される。ブズルファン、6-MP、AZP 等を試みるも、いずれも嘔吐を生じるために中止し、ＩＦＮ投与となる。ＩＦＮ投与後速やかに血小板数は減少し、連日投与２週間後には50万にまで減少。週２回に漸減した際に、血小板数の増加を認め、現在週３回投与にてコントロール良好であり経過観察中である。

血小板血症に対するＩＦＮ投与は極めて有効であり、文献的考案を加え報告する。

2．　骨髄異型性症候群より移行したＣＤ７陽性急性巨核芽球性白血病の一例

（内科学第三）野村信宏、野本さい子、上原豊彦、近藤美知、岡田潔、内田博之、六本木尚、代田常道、酒井信彦、伊藤久雄

72才女性、平成３年８月頃より軽度貧血を認めていたが、同４年４月貧血増強した為骨髄検査施行したところ骨髄芽球の軽度増加を認めMDS(RAEB）と診断される。同年６月より白血球増加、血小板減少も指摘され、８月[redacted]精査のため当院入院となる。転院時の検査では、末梢の白血球は28200/μl（Blast 72%）と増加しており、細胞表面形質でCD 7, HLA-DRは、陽性を示したが他のリンパ系、骨髄系抗原及び巨核球系のCD41、CD42は陰性であった。電顕の PPO染色陽性よりCD7 陽性急性巨核芽球性白血病(FAB分類：M7)と診断し、DVP 療法２コース、DCMP療法１コース施行したが、末梢血の芽球は50％前後を維持しており、化学療法に対し抵抗性を示している。

3．　腎移植患者におけるrh-GCSF 使用経験－移植腎機能に及ぼす影響－

（八王子医療センター臓器移植部）内山正美、玉置透、田中三津子、松野直徒、河野和之、小崎浩一、岩堀徹、伊保谷憲子、梶尚志、川口美香、杉浦美沙、加地紀夫、吉田雅治、櫻井悦夫、玉置勲、小崎正巳

【目的】腎移植患者にrh-GCSF 投与後、一過性の血清Cr値の上昇を経験したので、rh-GCSF の移植腎機能に及ぼす影響について検討した。

【対象】過去２年間に施行した生体腎移植４例と死体腎移植18例のうち抗拒絶療法施行中の３例と血液透析施行中の３例を除いた16例とした。白血球減少の原因は、DSG などの薬剤性14例、CMV 感染症７例、不明１例であった。

【方法】rh-GCSF 投与(0.5〜4.0 μg/kg/day）前の血清Cr値が2.0mg/dl以上（Ⅰ群,n＝12）と2.0mg/dl未満（Ⅱ群,n＝4)に分類し、各群における血清Cr値の上昇率、白血球数を検討した。

【結果】Ⅰ群12例中７例（58.3%）は白血球の増加とともに血清Cr値の上昇が認められたが、Ⅱ群の血清Cr値は不変あるいは低下を示した。

【結語】腎機能低下時にrh-GCSF を投与すると、一過性の血清Cr値の上昇を招くことがあり、拒絶反応との鑑別が重要であると思われた。